

34. 八女地方におけるスギ（品種）の成長型について

福岡県林業試験場 樋 口 真 一

I はじめに

スギ品種の特性を知る重要な因子に成長習性（成長型）があり、これは材の質や量・耐寒旱耐病虫害に深い関係をもつものと考えられ(1)さらに樹種品種により必ずしも一定ではなく、(1、2、3、5)成長旺盛な時期が若干異なるので品種区分の重要な因子とされている。(6) 今回はすでに類別されている、八女地方における主な挿すぎ品種について成長調査を行い成長型の区分を試みたのでその結果を報告する。

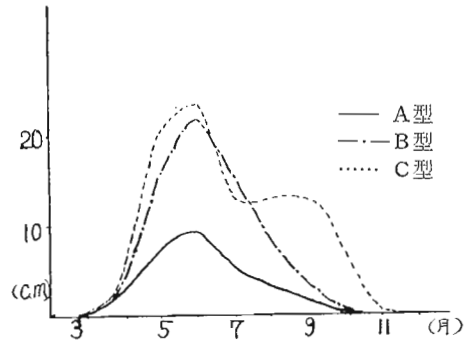
II 資料及び測定方法

- (1) 測定は福岡県林業試験場（以下当场）構内に昭和38年4月に植栽したスギ品種見本園で、昭和39年4月より旬毎・2年間に亘り上長成長について測定した。
- (2) 測定開始前の樹高の決定は葉色や、樹皮により肉眼的に区分しやすい短葉から長葉への変異点で区分し、上長成長の度合により100cm・150cmとそれぞれ測定基準点をつくった。
- (3) 1品種当り3本・mmまで測定した。
- (4) 気象的な資料は当场構内の黒木観測所の測定値を参照された。

III 結果と考察

- (1) 成育月数と品種
 - 6ヶ月型——アヤスギ・ナガエダ・コバノウラセバル・ゼンダスギ
 - 7ヶ月型——ヤベシチ・ウラセバルスギ・コガ・キナバ・マタサンスギ
 - 8ヶ月型——ヤブクグリ・ナカマスギ・ヤマグチ・ヤイチ・キウラ・カゾウスギ・フネサコ・アカバ
- (2) 全品種に亘り、月間成長量最大の月は6月で、次いで5月>7月>8月の場合が多かった。
- (3) 測定値を基礎に17品種の成長型の模式図を試作し第一図とした。

第一図 成長型模式図



A型——アカバ・アヤスギ・コガ・キナバ・ヤベシチ……5品種

B型——ウラセバルスギ・フネサコ・マタサンスギ・ヤブクグリ・ゼンダスギ・コバノウラセバルスギ・ナガエダ……7品種

C型——ナカマスギ・ヤマグチ・ヤイチ・キウラ・カゾウスギ……5品種

A型は晩生型(4)とされている品種が多く、コガ、キナバは同型他品種より若干成長期間が長いことが測定され、B型は早生型(4)で土地に対する要求度の高いとされている品種が多く、C型は早生型(4)であっても適応範囲が広いといわれている品種か、中生型(4)の品種であること。

- (4) 開序及び成長開始（伸長）も品種により異なり、昭和39年度では、ナカマスギ、ヤマグチ、ヤイチ、キウラ、カゾウスギ、フネサコ、ゼンダスギ・マタサンスギは4月上旬（4月5日測定。旬平均最高20.5°～最低13.7°）の測定で0.6～1.3cm伸縮し、他品種は4月中旬（4月15日測定・旬平均最高25.7°～最低15.7°）で0.3～1.5cmの伸長をしめし、成長休止（上長成長測定不能）は、ヤベシチ・ゼンダスギ・ナガエダ・アヤスギ・アカバ、は9月中旬（旬平均最高30.1°～最低21.3°）、キウラ・コバノウラセバルは10月下旬（旬平均最高21.5°～最低12.0°）・さらに、マタサンスギ・ゼンダスギ・アカバ・コガ・キナバは11月上旬（旬平均最高19.4°～最低8.1°）・ナカマスギ・ヤイチ・ヤマグチは11月下旬（旬平均最高16.9°～最

底3.8°)であった。

- (5) 全品種について、5月、8月に成長の谷が見られること、上長成長の大きい旬と小さい旬が交互に現はれる傾向があること。
- (6) 八女地方での直挿造林は3月～4月を中心に部で5月に行なわれることがあったこと・8月(下旬)から秋伐を始めることは、アヤスギ、ホンスギ、ヤベンチャブクグリ中心の時代では適策であったと考えられること。
- (7) 品種により開序時期に差があることは、育苗、育林の場では注意を要する。
- (8) 昭和41年10月末現在樹高は次のとおりである。

A型=200cm～300cm

B型=300cm～350cm

C型=400cm～450cm

参 考 文 献

- (1) 石崎 厚美……さしすぎの品種の特性について……………林木の育種 No. 8
- (2) 宮崎 榊……苗木育成法……高陽書院1957
- (3) 坂口 勝美……育 苗……林業講座昭28
- (4) 佐藤 敬二……福岡県八女地方におけるスギの品種に関する研究……………九大農学部造林学教室1958
- (5) 塚原 列男……スギの挿木品種に関する研究……………(第6報)……………日林九講 No. 16
- (6) 外山 三郎……企業的造林における杉の品種について……林経協月報 No. 30

35. アメラノキシロン種子の発芽促進について

福岡県林業試験場 川 島 為 一 郎

はじめに

アカシア類の苗木は成長が早く、春播きの場合は、播種を4月中旬頃実施して、5月下旬～6月上旬には床替するし、又秋播は10月上旬に播種して翌春には床替を実施するという早さである。従つて播種床においては出来るだけ一斉に発芽することが望まれる。

メラノキシロンの発芽はフサアカシアやモリシマアカシアより発芽が永くかかり、発芽勢を統一するような発芽促進方法が確立していない。このような発芽処理方法を検討する目的で、昨年メラノキシロンの熱湯処理と比重との発芽関係を調べたが、今回は発芽促進方法と発芽温度との関係を検討したので報告する。

実 験 I

材料および方法：昭和41年6月当時試験林内より採取したタネを、1.30の比重液により選別し洗んだタネをそれぞれ表Ⅰのとおり処理した。このタネを9cmのシャーレ3個に100粒ずつ入れ30°、25°、20°の恒温器内及び15°の冷室内で発芽を調べた。発芽期間を25日として、3個のシャーレの発芽数を平均したものを発芽数とした。(表中、処理方法の硫酸Ⅰはタネの表面に硫酸が付着する程度、硫酸Ⅱはタネの量の3倍の硫酸を使用し、それぞれの熱湯を入れ一定時間経過後

十分に水洗した方法)

表Ⅰ 処理別、発芽器内の温度別
積算発芽率の日数経過

処理方法	発芽器内温度		30°				
	経過日数	温度	5日	10日	15日	20日	25日
			%	%	%	%	%
熱 湯	100° 3分		0.0	1.3	9.7	14.3	15.0
	90 〃		1.0	9.0	28.3	50.7	67.7
	80 〃		0.0	14.7	51.7	80.3	94.0
	70 〃		2.0	23.7	66.3	90.3	98.7
	60 〃		0.7	23.3	63.3	87.3	92.7
硫酸Ⅰ	100 〃		0.3	2.3	2.3	2.3	2.3
	90 〃		7.7	47.7	57.0	59.0	59.0
	80 〃		52.7	93.7	97.0	77.0	97.0
	70 〃		28.3	92.3	99.3	99.3	99.3
	60 〃		46.3	97.3	98.7	98.7	98.7
硫酸Ⅱ	100 〃		6.3	9.7	9.7	9.7	9.7
	90 〃		18.0	46.3	46.3	46.3	46.3
	80 〃		74.0	98.0	98.7	98.7	98.7
	70 〃		75.3	99.7	99.7	100	100
無処理	60 〃		34.7	92.7	97.3	97.7	97.7
	無処理		0.0	13.7	36.0	45.3	46.3